

令和 3 年 第 7 回
上小阿仁村議会定例会

会 議 録

令和 3 年 1 2 月 7 日 (開会)

令和 3 年 1 2 月 9 日 (閉会)

○議長（伊藤敏夫） 再開します。

○議長（伊藤敏夫） 次に、5番 萩野芳紀君の発言を許します。はい、5番、萩野芳紀君。

（5番 萩野芳紀議員 一般質問席登壇）

○5番（萩野芳紀） それでは、我が村の観光についての質問をいたします。

8月、休眠状態だった我が村の観光協会をどうするかの話し合いが行われました。確か、村長も出席だと思いましたが、この件は、ご存じだと思います。その結果、その時の村長の話で、観光協会がない自治体はないという掛け声がありまして、新たな体制のもと、観光協会が再出発いたしました。そう、村長がおっしゃっている割には、補助金はもうちょっとほしいのは、わたしたちの本音なんですけれど。

地域では現在、宿泊施設は農家民宿1軒だけです。先日は、年内最後の泊り客、これは大学生で卒論作成のため、来た方なんですけど、来て、「こぶ杉」や「天然杉」を見て、その「こぶ杉」の大きさ、雄大さ、「天然杉」の雄大さに感動していました。また、わたしたちの日常に溶け込んでいる、自動運転にも興味をもって乗っていました。先に、自動運転を見に来られた方は、私たちが日常見慣れて、全く興味をもっていない白鳥を、熱心に撮影していました。私たちが観光客を呼び込むものが少ないと感じるのは、間違っているかも知れないと、その時、思いました。いつも見ているわたしたちとの感覚、角度の違いかもしれません。そのような視点から、これからの対策によっては、まだまだ観光客を誘致することが可能だと感じています。

村長は、村の観光発展をどのように考え、また、今後の課題として、来年は地方創生交付金もなくなりますが、今後のDMOとの連携をどのようにして続けていくつもりなのかをお聞かせください。

○議長（伊藤敏夫） はい、小林村長。

（小林悦次村長 登壇）

○村長（小林悦次） 我が村の観光についてであります。

観光協会が道の駅に事務所を構えたことによりまして、来村者に対し、村の観光情報がより、目に付きやすくなったことや、休日の問い合わせにも対応が可能となり、情報発信力が格段に向上してきたというふうに思っております。また、これと合わせて、新たな体制による新しい事業が企画・実施されることにより、これまで以上に、観光客を呼び込むことができるのではないかと期待しているところであります。

DMOのここ数年の対応は、農家民宿の開業を支援する取り組み、モニターツアー、観光客受け入れのための人材育成事業の実施や、道の駅での写真展の開催など、村を会場にした事業もあります。観光客の受け入れ体制構築のため

の準備が、進んだように思っております。

地方創生交付金をつかったDMOの事業展開は、今年度で終了となります。事務局からの説明によると、来年度以降の地方創生交付金の事業に、改めて、応募するとのことであります。

村からは、交付金の事業が採択された場合であっても、村が対象となる事業を確実に実施することなどを条件として、要望をしております。事業採択されなかった場合の対応については、関係市町村で協議することとなっておりますので、ご理解をいただきたいというふうに思っております。

以上であります。

○議長（伊藤敏夫） はい、萩野芳紀君。

○5番（萩野芳紀） ただ今の件で、DMOとの関係ですけれども、是非、来年も応募して、採択されて、続けていけるように、期待いたします。

観光協会としても、それに力を入れて、貸して、一生懸命やりたいと思っております。

また、それとは少し、話が変わりますけれども、五反沢大滝周辺の雑木伐採。これも今年、皆さん方と一緒に見に行きましたけれども、もう少し、必要じゃないかなあと私、感じましたので、その辺のところを。そして先日、こぶ杉を見に行ってきました。その折は、ウッドチップがあって、非常に雨降りだったんですけれども、非常に歩きにくかったのですが、だいぶ、雨のため腐ってきているというか、劣化してきていましたので、是非続けて、毎年、少しずつでもいいから、やってほしいと、このように思っております。

更に、観光で言えば、上小阿仁プロジェクト。これはまだ、上小阿仁プロジェクトという言葉は残っております。その辺がどうなるか。

あともう1つだけ言いたいのは、私たち議員の中でも話をしているんですけれども、小阿仁川にアユを放流しています。アユ釣りのお客さんのマナー。これがあまり良くないという話を聞いていますけれども、こういう方を是非、指導していただいて、たくさんの方にアユを釣りに来ていただいて、小阿仁川に入っていただきたいと思っております。今年は死亡事故もありましたけれども。結局、たくさんの方が来ているということは、呼び込む力があることなんじゃないかあと思いますので、是非、その辺のところ、よろしくお願ひしたいと思ひます。

五反沢大滝のこと。ウッドチップのこと。その辺のところ、今できる範囲で、お話を伺いたいと思ひますけれども。

村長、よろしくお願ひします。

○議長（伊藤敏夫） はい、小林村長。

（小林悦次村長 登壇）

○村長（小林悦次） 大滝、そして大内沢の件について、議会からも視察をしていただきながら、いろいろ指摘を受けて、対応させていただいている場所があります。現場を再度、確認をさせていただいて、どのような部分に対応できるのか、それを少し、確認をさせていただいてから、対応させていただければと。私、ちょっと現場を見ておらないし、担当にもまだ、確認をしていない点がありますので、現場を確認させていただいてから、対応させていただきたいというふうに思います。

○議長（伊藤敏夫） はい、萩野芳紀君。

○5番（萩野芳紀） その件につきましては、これで結構であります。

次に、観光に繋がっている話になりますが、山野草愛好会の後継者対策。これについて、お聞きします。

コロナ対策のため、今年も山野草展示会が中止になりました。毎年、我が村において、最大の集客力を誇るイベントとなっております。約2,000人。多い時では4,000人くらいはいたと思います。このくらいの集客力を誇るイベントは、上小阿仁にはありませんので、是非、やってほしいというのが、村民皆の願いだとは思いますが、今現在、道の駅にも少しは山野草を展示していますが、山野草を栽培している方の高齢化、継承者、そしてまた、免許返納等の問題を考えた場合、観光客誘致のためにも、道の駅周辺に、常時展示できるビニールハウスまたはガラスハウスのようなものを設置する考えはないかをお聞きします。というよりむしろ、私からすれば、要望でもあります。それを管理しながら、山野草技術の後継者、技術の伝承者として、協力隊を募集する考えはないか。協力隊も最近3年満期いても、その後、村に住み着く方も全くいません。しっかり技術を習得し、伝承者として、村に住み着いていただくようにしてほしいと思います。

村長の考えをお願いします。

○議長（伊藤敏夫） はい、小林村長。

（小林悦次村長 登壇）

○村長（小林悦次） 山野草展示会につきましては、村に観光客を呼び込むことができる、人気のイベントであります。その山野草を育てることができる後継者がいないということは、以前から懸念されてきておるところであります。

道の駅の近くに山野草展示のためのガラスハウスを設置し、その管理者として協力隊員を募集し、後継者として育成するというご提案であるというふうに思います。これまで何回も検討をさせていただきました。ガラスハウスの建設に踏み切れなかったのはですね、指導者の確保と技術が高度であり、経営を安定させるまでに長い年数を要するということが考えられるためであります。

協力隊員の委託期間は、3年間であり、期間を終えた後、山野草の育成・販

売を生業として、村に定住することが可能かということが課題としてあります。

ガラスハウスがあることで、集客が増加することが予想されますので、道の駅がその管理や人件費を負担できるかというふうなことについては、やはり、協議が必要になるというふうに思っております。

村としては、人材の募集・育成や施設等の整備については、何らかの支援をすることは、可能というふうに考えておりますので、山野草愛好会等関係団体とも協議しながら、検討させていただきたいというふうに考えております。

以上です。

○議長（伊藤敏夫） はい、萩野芳紀君。

○5番（萩野芳紀） 今の件で、山野草を担当している方には、人生的な時間はあまりないので、是非ともこれは急いで、やってほしいと思います。最後に、協力隊というよりは、村民の方が後継者としていけば、1番望ましいと思いますので、その辺のことも含めて、対応をお願いしたいと思います。

これについては、これで終わらせていただきます。

○議長（伊藤敏夫） はい、萩野芳紀君。

○5番（萩野芳紀） DX（デジタルトランスフォーメーション）というのは、新聞に出ているので、詳しく説明する必要はないと思います。これに向けた、専門職員の採用と教育環境の整備についてという質問をさせていただきます。

近年、新しい技術、取り組みが導入され、省略したアルファベットで表記する傾向があります。デジタル技術を浸透させることで生活を良いものに変革することをデジタルトランスフォーメーション、これを略してDXと言っています。英語では、トランスフォーメーションエックスということで、置き換えるということで、DXと言われているそうです。その他、持続可能な開発目標をSDGs、人工知能をAIなど、数え上げるときりがないほど、日常で、ローマ字がいっぱい、ありふれています。

9月にはデジタル庁が発足し、この分野は更なる発展や変化が見込まれます。当村においても、この分野の様々な整備や計画が必要ではないでしょうか。

SDGs 17項目の4項目には、「質の高い教育をみんなに」とうたっています。

そこで、村長にお伺いします。

今後、デジタル化がますます推進していくことに対応して、職員の知識の向上や教育を行うことが必要であり、プログラミングのできるような専門の職員を採用する考えはないでしょうか。また、教育においては、GIGAスクール

構想等におけるペーパーレス化が、ますます続くと考えられます。令和6年度には、デジタル教科書の本格導入と聞いております。社会的にもDXが進むのは、確実です。家庭内でも気軽に扱えるWi-Fiなどインフラの整備も必要になります。その体制整備と、デジタル端末の更新時期といわれている、5年を経過した後の対応など、専門的な知識も必要だと考えられます。その予算をどうするのかも、今から考えなければなりません。

昨日、開会した臨時国会でも、首相は、「デジタルの力」ということを、強調していました。更に「私たちの未来は、時代を生きる我々の決断と努力によって決まります」と首相が続けておりました。

村長の考えをお聞きします。

○議長（伊藤敏夫） はい、小林村長。

（小林悦次村長 登壇）

○村長（小林悦次） デジタル化に関するご質問であります。

最初のご質問の専門職の配置についてでありますけれども、職員がシステムのプログラミングをするような場面というふうなのは無いというふうに考えております。といいますのはですね、県内12町村で構成する秋田県町村電算システム共同事業組合というのがありまして、その中で、村で対応しているシステム、財務会計や各種使用料等のシステムについて、すべて、そこで対応されているというふうなことで、例えば、法律改正等があれば、そのたびに組合の委託業者がですね、対応して、町村が負担金を出しているというふうな状況にあります。なお、システムのデータについてもですね、必要に応じて村の職員が取り出すことができ、例えば、エクセル等を活用して、加工して使用することもできるようになっております。また、更なるシステムの構築についてはですね、エクセルと合わせて、アクセスがあるんですけども、こういうものを利用すると、簡単なプログラミングは、必要に応じて、対応ができるようになっております。ですから、職員研修によって、対応してやらせていただいているというふうな状況になります。

国が提唱している自治体のデジタルトランスフォーメーションは、主に行政手続きのオンライン化、AI、自治体情報システム標準化などだと思います。これらについては、秋田県町村電算システム共同事業組合でも協議をしております。適切な時期に策定していきたいというふうに考えております。

なお、役場内のペーパーレスにつきましては、他町村の例を見ますと、一番進んでいるのがやはり、議会でのタブレット使用等でペーパーレスにしているということだと思います。

次に、令和6年度からのデジタル教科書の本格導入についてでありますけれども、今年6月に出された、デジタル教科書の今後の在り方等に関する検討会

議の第一次報告で示されたものであります。その中で、従来の紙の教科書とデジタル教科書の併用が方向性の一つとして示されております。この組み合わせが、ふさわしいと考えられます。しかしながら、紙の教科書は無償支給なのに対して、デジタル教科書は有償であるというふうな課題も残っております。デジタル教科書を使用する体制の設備につきましては、一人一台の端末を学校だけでなく、自宅においても使えるようにする計画であります。端末の持ち帰りはまだ進んでおりませんが、12月中に、実証実験として、中学1、2年生と6年生に実際にタブレットを持ち帰ってもらいます。今回はインターネットが学校と繋がるか、ズームやチームスのアプリケーションが正しく起動するかを確認することにしてありますが、何回か実証実験を重ね、徐々に低学年にも拡大していく予定となっております。

Wi-Fi が使える環境が整っていない家庭もありますが、ルーター等を貸し出したり、あるいは、公共施設を利用してもらうなど、方策を検討しております。一方で、教員の技術向上も課題であります。技術に優れている一部の教員の負担にならないよう、教員相互の研修会の実施や外部講師による指導等などを進めたいというふうに思っております。

これからのデジタル社会においても当面は、端末の更新が課題となります。教育の現場においても同様です。G I G Aスクール構想で、令和3年2月に購入した一人一台の端末は、購入業者から令和7年度末の更新が望ましいとの提言をいただいております。

現時点では、更新に対する国・県の補助事業は、明示されておられません。新規補助事業の動向に注目しながら、国・県の支援をお願いして、一般財源の削減に努めていきたいというふうに考えておりますので、よろしくお願いをしたいと思います。

○議長（伊藤敏夫） はい、萩野芳紀君。

○5番（萩野芳紀） いろいろ回答いただきました。私、お話ししたのに続けてですね、もうちょっとお話をさせていただきますと、関東地区の市とか県とかは、やはり、パソコンを自宅に持ち帰っているそうです。私も知っている人が3人いますけれども、3人ともパソコンを自宅にもって、帰ってやっているというお話を伺っています。当村とは比べものにならない場所なんですけれども、そういう場所とか関係なく、そのようなことができるように、今後は進めていく必要があるのではないかと思います。そして、やはり10年後くらいになればですね、この村にもAIとかが、役場の庁舎内にもでて、劇的にこの部分は変化すると考えられますので、例えば、DX10年計画とかですね。村長は山の10年計画とか100年計画にこだわりますけれども、やはり、DXも10年計画とか、20年、30年計画とか、このようなことも検討する必要があるんじ

やないかなあと思います。

そのようなこととお話させていただいて、私の質問を終わらせていただきます。

ありがとうございました。

○議長（伊藤敏夫） これで萩野芳紀君の質問を終わります。

暫時休憩します。